展開案パターンＡ

テトラバランスの「インフラ」にフォーカスした展開
サイクリングクラブもインフラだ！自転車さんぽネットワークの提案！

「転遊研＋いわくに研究会＝毛利チャレンジ」と「ＳＢＡＡプラスショップ」との立体コラボ企画として、自転車の日常利用とスポーツ利用の溝を埋めつつ、地域密着型マルチサイクリングクラブの可能性を探る！

⇒ＴＨＴ２６◆自転車さんぽをベースにした「毛利チャレンジ」は、２０１８年の明治維新１５０周年に向けて、独自に仕込み中の全国展開を標榜する企画です。自転車協会の後援を受けつつ、ＳＢＡＡプラスショップに運営や集客の協力を求めつつ、次世代に繋がる提案をする。

補足

繰り返されるブームの度に、走る場所の提供としてイベントが行われる。

その意味ではイベントも箱モノに等しい。

また“インフラ”とは一般には道路を念頭に置いた走行環境（道路事情）のようですが、走る場所や楽しむ機会と広義に考えると、日本の場合、休日事情がネックになっています。

さらに楽しむ場所や機会と考えると、クラブの存在もインフラと言えます。

それはスイミングスクールやゴルフの会員に近いものです。

そう言った広義のインフラの必要性を共有するために、日本の実情に合った、いつでもどこでも実施できるＴＨＴ２６をベースに、自転車の二面性や多様性をコラムの話題として展開します。

「パターンＡ」の連載案

初回／2017年03月	2回／2017年07月	3回／2017年10月	4回／2018年01月	5回／2018年04月	6回／2018年08月	終回／2019年01月
共通の枕	等身大企画	多様性	標準化	春需でソフト	地域貢献	共通のまとめ
ショップのメリット・デメリット	THT26と毛利チャレンジ	毛利チャレンジのⅠとⅡ	毛利チャレンジトーナメント	「街道」「山道」「町の道」	毛利チャレンジとSBAAプラス	サイクリストライセンスプロジェクト
テトラバランス	ツーリングコンペティション	サイクルステーション構想	地域密着型マルチサイクリングクラブ	バイシクルグランスミーティング	観光メンテナンス	タスクフォース

※共通の枕から共通のまとめまでで、ほぼテーマを網羅していますが、パターンＡでは「自転車市民権の獲得」や「サイクリングの法的根拠」には切り込めません。かと言って、ＢやＣでもバランスを欠きます。結局、Ａ、Ｂ、Ｃをパラレルで行う必要があるようです。

展開案パターンB

テトラバランスの「ソフト」にフォーカスした展開
自転車との最初の出会い、春需でソフトを売ろう！等身大イベントの充実とは？

ＳＢＡＡプラスショップでソフトも商材にする場合、ユザワヤ方式が求められます。そのためソフトの標準化も求められますが、これまでの日本初企画の成果とその道半ばを検証しながら、春需でソフトを売るための必要十分条件を探る！

⇒ユザワヤ方式とは、手芸店がスクールを開催しその作品展を開催することで素材商品が売れるというマッチポンプな仕組み。それを応用して、様々な自転車ソフト（共通の枕の日本初の企画）をショップ定員やユーザーに体験して頂きながら、イベントの充実（種目、回数）を図る。

補足

繰り返されるブームの遠因にセールストークの薄さがあるように思います。

それは、自転車購入に訪れたお客様に、その時売れている車種を単純に勧めるからです。

本来、その人の使用目的に合った車種を勧めれば、自転車の多様性が保たれて、
ブームではなく、文化に近い状態を維持できたはずです。

では何故トークが薄いのでしょうか？
それはショップスタッフの経験不足が第一原因と思われます。
さらにそれは、サイクリング協会の新陳代謝を妨げた要因でもあります。

様々な自転車の遊び方を経験して、それを伝えることが出来なければ、
ブームはブームで終わってしまいます。

「時には参加者、時にはスタッフ」という考えで、
貪欲に自転車ソフトの色々を経験しなければ、
春需でソフトを売ることは不可能です。

※等身大イベントの充実こそが、私の目指すところです。
　その意味で今回のコラムは、このパターンＢがイチオシです。

⇒「イチオシのパターンＢ」へ続く！（Ｐ８～Ｐ１１）

展開案パターンC

テトラバランスの「ハート」にフォーカスした展開
「する・みる・ささえる」、ハートのある人材を探せ！サイクリストライセンスを考える！

既存のイベントや希望的展開を問わず、全ての自転車企画に共通する課題は人材の確保です。
そして「する、みる、ささえる」に照らし合わせ、地域貢献に興味のあるハートを持った人材を発掘する「サイクリストライセンスプロジェクト」を「日本自転車環境整備機構」主導で提唱する。

⇒「ＭＴＢ耐久レース＋ツーリング＋スクール」と言うパッケージ型出張イベントを軸に、関係者の交流を図る。その関係者は、ショップ、ユーザー、地域、そしてメーカーやオーガナイザーのことで、皆が一堂に会せるように配慮する。そのため、提案と実践を分けて組み立てたるか、最初から別枠企画とした方が良いかも？

補足

サイクルエイドジャパンでも実走スタッフの確保に苦労しました。

その人材を確保、育成するためには、全国規模で定期的な呼び掛けが必要です。

そのための方法論をコラムで語る訳ですが、単なる問題提起に終わる可能性が大です。

そこで提案と実践の分離という考えになります。

何故か？

サイクリングは単純なようで、奥が深い、と言うか、日本では法律的にグレーな存在です。

どんなに正論で人材確保を訴えても、現時点では一般道での展開には無理が生じます。

その無理を解消するには「自転車ソフトの標準化」が肝となりますが、
その成立を待っていたのでは埒が開きません。

そこで考えられるのが、クローズドサーキットでのＭＴＢチーム耐久レースと
ツーリングとスクールとワークショップの合体企画です。

ＭＴＢブームの財産がまだ残っている“今”なら、まだ間に合う提案です。

※合体企画の意図は、やはり関係者が一堂に会する機会を作れることです。
　その広範囲におよぶ関係者に誰がどのようにして声を掛けるのか、それがかなり難産！？

最終回は共通のまとめ

次世代へのバトンタッチ

ブームから文化へ！次世代が担う“タスクフォース”とは？ＳＢＡＡプラスの担うべき役割とは？

『サイクリングとは、レースを含む、スポーツサイクリング全般』
ＵＣＩのルールブックにはそう表現されているそうで、自転車ソフトに境目が無いことを示しています！

ショップのメリット・デメリットの根源には、同じ自転車なのに関係者の間でベクトルの方向が異なる現状があります。
そのベクトルを揃えることは制度面からほぼ不可能な話しですが、共通項を見つけて、少しでも自分達の活動環境を改善することは可能だと思います。
そう言った意味の“タスクフォース”を、『サイクリストライセンスプロジェクト』や『サイクリングプロジェクトジャパン』のようなネーミングで組織することが、次の世代へ、第一次・第二次のサイクリングブーム世代からの夢や想いを繋ぐバトンではないでしょうか？

パターンＡ、パターンＢ、パターンＣは、どれもこれまでの自転車ブームのおさらいと、それを支えた人のたちの最後の活躍の場です。そして、この“タスクフォース”は、次世代サイクリストが日本の新たなサイクリングシーンを創造する場の一歩手前となります。

その夢の先には、リアル・サイクルエイドジャパンがあります。

また、三位一体型サイクリングクラブの組織的展開で、一般からの支持が高まり、自転車市民権獲得が成った先には、道路事情や休日事情が改善され、等身大自転車イベント実践のハードルも下がっている筈で、「ＭＴＢラリーレイド世界選手権」や「サイクリストジャンボリー」や「サイクリングフォーオール」も実現可能だと思います。

そう言った実践ハードルの下がった状況で、自転車愛好者が増殖するならば、同時に自転車文化に対する関係者のベクトルも揃っており、各地に地域密着型マルチサイクリングクラブの基地としての、「サイクルステーション」が夢ではなくなると思います。

サイクルステーション構想 by B. E. I.
地域密着型サイクリングクラブをベースにサイクリングネットワークの再構築！

※サイクルステーションとは？・・・正に日本の新たなサイクルシーンを創造する基地となる考えです。
そのためには「標準化」「市民権獲得」「ネットワーク化」の並行作業が求められます。

イチオシの「パターンB」で実践する自転車ソフト！

「街道」「山道」「町の道」
それぞれの道に、それぞれのツーリングコンペティション！

パターンＡは、広義なインフラ「地域密着型マルチサイクリングクラブ」を「毛利チャレンジ」を使ってひもとくもので、パターンＣは、ハートのある人材（Ｓ級サイクリストライセンス保持者）を育成する「バイシクルグランスミーティング」を新たに仕掛けるもので、どちらもＳＢＡＡプラスショップへの関連性の直間比率が“３対７”です。しかしその点パターンＢは、“８対２”と直接的な成果が期待され、ブラシュアップ講習会の延長と考えられます。

ブラシュアップ講習会・実践ソフト編

サイクリングは個人や任意グループで道路交通法を遵守して楽しむには何の問題もありませんが、参加者の募集や、規模が大きくなると、事情が激変します。責任の所在や、迷惑行為といった問題が発生し、保険屋さんや、警察屋さんが良い顔をしません。通勤時の自転車暴走族や、スポーツバイクのマナー違反、そして自転車が加害者となる接触事故など、それでなくとも立場は微妙です。

自転車市民権が確立されていない日本の実情で、警察も認める自転車ソフトを実験企画で探り当てました。道で遊ぶのはＮＧですが、道を遊ぶ“旅”ならばＯＫと言うことで、探り当てたのは路地裏も得意とする“ＴＨＴ２６”です。但し、道には「街道」「山道」「町の道」と種類があり、走り出したら自己責任を前提にしたツーリングコンペティションが、実践する自転車ソフトです。

ここまで明確な解答が出ていながら、ひと筋縄ではありません。これも自転車市民権が確立されておらず、警察の求める自転車ソフトの標準化が成されていないからです。道には様々な種類があり色々な楽しみ方がある十人百色のサイクリング。それでは警察もバンザイするしかありません。

そのため、警察に大規模サイクリング大会の相談をすると、直接的なアドバイスだと迷惑行為を認めることになるので、殆どの場合、誘導尋問的アドバイスで、小学１年生の初登校日という“特殊な運営形体”へと導きます。

しかしサイクルエイドジャパンでは、そうはしませんでした。主な理由は二つ。ひとつは実施内容を既に発表していたから。もうひとつは道路交通法に抵触する“特殊な運営形体”では示しがつかなかったから！？そこで緊急に呼び出されたのが、何故か私でした？！

確かにツーリングコンペティションを日本に紹介したのは私ですが、それを応用した運営方法を求めていたかどうかは不明です。

さて話を戻して、実践ツーリングコンペティションです！
「街道／ファストラン」
「山道／ＭＴＢラリーレイド」
「町の道／マップリーディング」
以上の３つになりますが、先述のような諸事情に加え自転車の走行環境問題もあり、アレンジにアレンジを加えて具体化し、以下の３つを体験&実践することに！

「街道／ファストラン」
⇒ 「ハンドレッド・バイ・ハンドレッド」

サイクリングの原点は「自転車旅」です。
その派生の頂点がサイクルロードレースですが、途中段階として、ロングライド・ファストランツーリングというジャンルがあります。いわゆる耐久ランです。
個人で日本縦断や、東京～大阪にチャレンジするのは、全くの自己責任なので、当局も関知していませんが、そうでない実施内容の場合、色々と問題があって容易に実施出来ません。

そこで「ハンドレッド・バイ・ハンドレッド」です。

≪実施概要案≫

◆**タイトル**：ハンドレッド・バイ・ハンドレッド２０１７／２０１９／２０２２
◆**沿革と目的**：故今井彬彦ニューサイクリング編集長のアドバイスから始まった日本版のブルベ「ルート・エヌ」や、海外視察を経て日本初開催となった「ＢＲＭ」。しかし、どちらも中級者以上を対象にしており、また、夜間走行や遠隔地でのコース設定のため、普及企画とは言い難い面があります。
ハンドレッド・バイ・ハンドレッドは、１００ｋｍを１００回走ろうという単純な目的で、ロングライド初心者にはエントリー企画として、中級者以上には自由度のある派生企画の提供も可能なベース企画です。
◆**実施内容**：全国に１００ｋｍのモデルコースを１００ルート設け、走破回数によって認定表彰するナショナルブルベです。スタートや通過確認、フィニッシュはルート・エヌ方式で行います。
◆**実施スケジュール案**：募集／３月～７月、出走／４月～１１月、集計／６月、９月、１２月
◆**参加方法**：所定の用紙に必要事項を記入の上、登録料や認定料を添えて、ＴＨＴジャパン準備事務局に現金書留等で申し込むか、ホームページよりのＷｅｂ申込でお願いします。
◆**認定と派生企画**：１００ｋｍ走行１本でエントリー認定を行い、５本毎に走破認定証を発行します。また、２５本、５０本、７５本でクオーター表彰を行い、１００本でコンプリート認定をします。さらに、月間表彰や年間表彰、特別賞も出走人数に応じて設けます。
派生企画として、「さんいん１３００」を既に実施中で、「ディアゴナール近畿」や「リバーｔｏリバー信州」を導入予定です。さらに最終目標として一期一会の日本一周ルート構想もあります。

※ナショナルブルベとＴＨＴジャパン：ツーリングへの動機付けと双方向のデータ収集を目的とした日本全国を網羅するブルベが「ナショナルブルベ」です。その取りまとめを行う任意団体を「ＴＨＴジャパン」とします。そして今回の企画は単年で１００本は難しいので、最低でも３年、出来れば６年計画で進めたいと考え、それに合わせて組織化したいと思います。

★**ブラッシュアップ連動企画**：「ディアゴナール近畿」と「リバーｔｏリバー信州」では、集中ラン形式の走行会も計画しています。その告知募集や世話役をブラッシュアップ企画として行いながら、ショップスタッフも実走参加もする。また、フィニシュ地点で交歓会やワークショップも行いたい。

「山道／MTBラリーレイド」
⇒ 「バイシクルグランスミーティング」

山道を楽しむサイクリングは、ＭＴＢ以前はパスハンティングや山岳サイクリングとして、一部のマニアに親しまれていました。ＭＴＢ出現後はその走破性能も手伝って、山旅、ラリー、フリーライドとかなりの愛好者が山道に入り、地元の歓迎もある反面、反対の声も少なくありませんでした。そしてブームが終息し、山道の走行問題はお蔵入りとなっています。

そんなグレーゾーンの山道で、ツーリングコンペティションを仕掛けるのは愚の骨頂です。そこで、各地で実績のあるＭＴＢチーム耐久レースを核にした「クローズドサーキットレース＋ツーリング＋スクール＋ワークショップ」のパッケージ企画「バイシクルグランスミーティング」です。

≪実施概要案≫

◆**タイトル**：バイシクルグランスミーティング２０１７～２０１８

◆**沿革と目的**：ＭＴＢブーム前夜、都内のオフロードバイクショップがオリジナル企画としてＭＴＢ４時間耐久レースを福島県南部で日本初開催。その可能性を感じた自転車専門誌が開催ノウハウを特集。その後、スキー場のグリーンシーズン企画として、メーカーも遊ぶ場所の提供として、日本全国に瞬く間に広まる！しかし乱立状態の感は否めず、また、仕掛け方が薄く、競技とのギャップもあり、飽きられるのも早かった。
このパッケージ企画は、それらの欠点を補う工夫を施して行うもので、将来的には「地区予選～ブロック大会～全国決勝大会」という流れにしたいと考えます。

◆**実施内容**：欠点を補うと言っても検証はこれからで、２０１７年度に３回、２０１８年度に５回の計８回を、会場毎に目的や内容を変えて行います。尚、３回と８回はフルバージョンで。

◇**レース**：基本的には４時間以上のチーム対抗リレーレース。欠点解消バージョンとして「４＋２＝６時間耐久」を実験実施したい。

◇**ツーリング**：オフロードを含むロゲイニングかＴＨＴ２６を実施。

◇**スクール**：キックバイクからスキルアップスクール、そして模擬ツーリングを行いながら、スタッフの育成も行う。

◇**ワークショップ**：地域密着型マルチサイクリングクラブの必要性を、ショップ・ユーザー・地域・オーガナイザーで共有する。

◆**実施スケジュール案**：２０１７年１０月／小海町
１１月／富士見町
２０１８年０３月／富士河口湖町
０８月／未定　０９月／未定　１０月／未定　１１月／未定
２０１９年０３月／未定

◆**参加方法**：所定の用紙に必要事項を記入の上、参加料を添えて、ＢＧＭ事務局に現金書留等で申し込むか、ホームページよりのＷｅｂ申込でお願いします。

◇**トーナメント企画補足**：１年間で予選～ブロック～決勝を行うには無理があるため、**2年跨ぎ企画**を模索する。また、ＭＴＢの山道利用を含む自転車走行環境整備は関係者の垣根を越えた連係が必要なため、多様性に富んだ内容にして、より多くの冠スポンサーを戴く**ブロック大会**に拘る。

★**ブラッシュアップ連動企画**：２０１７年度の、小海町、富士見町、富士河口湖町の大会と連係して、大会運営のノウハウを学ぶ！

「町の道／マップリーディング」
⇒ 「毛利チャレンジトーナメント」

日本の風土や実情に合った自転車遊びを模索する実証実験から「ＴＨＴ２６」を見つけました。それは旅と競技の両方の性格を持ち、年齢性別車種不問で楽しめ、主催者の大小を選ばず、わらしべ企画の性格を有する、他の移動手段にも応用可能な超優良自転車ソフトです。

そのため、地域密着型マルチサイクリングクラブを提案する場合、行政や警察を納得させるには、これしかないと確信します。但し、実施規模が等身大のため、地味な印象は否めません。そこで、合わせ技として「毛利チャレンジトーナメント」となります。

≪実施概要案≫

◆**タイトル**：毛利チャレンジトーナメント２０１７～２０１８

◆**沿革と目的**：２００５年夏・シマノ鈴鹿ロードでコッソリと行った現場クイズを写真で示すマップリーディングが、東京国際自転車展の企画担当者に見初められ、そこから試行錯誤を繰り返しＴＨＴ２６として完成したのが２００７年春！震災前には全国１５～２０会場で実施するまでに拡大。その主催者には、行政やＮＰＯ、ショップ、個人が混ざる状況であったが、震災で新規会場の開拓を中断していた。しかし、地域興しや低予算企画として引き合いがあり再提案中。

◆**実施内容**：ＴＨＴ２６のトーナメント企画。エリア内２６ヶ所のトレジャーポイント（ＴＰ）から８ヶ所以上を巡り、最少訪問者ＴＰを当てる、逆転の発想のオリエンテーリング。偶然性優先のため、誰にでも上位入賞のチャンスあり！

◆**実施スケジュール案**：２０１７年度　連携大会／８月～１２月(関ヶ原以西の各地)
　　決勝大会／翌年３月(山口県萩市ｏｒ岩国市／予定)
　　２０１８年度　連携大会／初夏～初冬(全国各地)
　　決勝大会／翌年春(山口県下関市ｏｒ防府市／予定)

◆**参加方法**：所定の用紙に必要事項を記入の上、登録料を添えて、いわくに研究会事務局に現金書留等で申し込むか、ホームページよりのＷｅｂ申込でお願いします。

◇**毛利チャレンジとは**：２０１８年の明治維新１５０周年応援企画として、いわくに研究会が提唱している、ザッピング型ゲーム旅です。ＴＨＴ２６を応用し「ドライブ」「自転車」「公共交通＋徒歩」の３バージョンで、エリアの特徴に合わせた展開を模索中。その全国展開をトーナメント企画として自転車バージョンで行います。またネーミングは、毛利博物館の了解を得ています。

★**ブラッシュアップ連動企画**：等身大企画としての実績は抜群であり、日常利用とスポーツ利用の懸け橋としても秀逸の為、運営ノウハウを各ショップが習得し、実施回数を増やし、各方面へのアピールとします。そのため「体験参加」「スタッフ体験」「模擬大会」「研修会」等を実施！

最後になってしまいましたが「ツーリングコンペティション」の補足解説です。

現在実施されている多くの「一般のサイクリング大会」は、首長さんのたっての要望により道路の目的外使用が許可されている「特殊利用イベント」です。一方、旅と競技の両方の性格を持つ「ツーリングコンペティション」は、確かにタイム計測が実施内容に含まれますが、道路交通法を遵守した運営を心掛けています。そのため、参加者にも大人のサイクリストとして、走り出したら自己責任として協力を求め、運営の省力化が可能で、等身大イベントと言える所以です。

補足の補足！ （自転車協会の後援以上の協力が前提！）
「ツーリングコンペティション」と「サイクリストライセンス」と「維新150周年」

※パターンB・C・Aは、自転車協会のSBAAエキスプレスとのコラボ企画の展開案です。

パターンB（春需でソフト）	パターンC（サイクリストライセンス）	パターンA（自転車さんぽネットワークの提案）
テトラバランスの「ソフト」にフォーカスした展開	**テトラバランスの「ハート」にフォーカスした展開**	**テトラバランスの「インフラ」にフォーカスした展開**
「街道」「山道」「町の道」 それぞれの道に、それぞれのツーリングコンペティション！	**マルチサイクリングクラブの必要性を、ショップ・ユーザー・地域・オーガナイザーで共有する。**	**「町の道／マップリーディング⇒毛利チャレンジトーナメント」 ※岩国かるたドライブ@毛利両川トーナメント**
ツーリングとレースの両方の性格を持つ、自転車ソフト。 集計が伴うため、エントリー料を設定でき、イベントとしても、セルフ企画としても実施可能。オルタナティブツーリズムとして地域資源の活用が期待できる。	どんな企画の実践にも、人材の確保が前提。 「時には参加者、時にはスタッフ」と言う考えのもと、等身大の企画が安定して行えるよう、自転車市民権の獲得（≒交通基本法）を目指すためのワークショップを定期開催。	わらしべ企画・THT26の全国展開のキッカケとして！ スポーツ利用と日常利用の溝を埋め、主催者やエリアを選ばない等身大企画として可能性は無限。但し、道路交通法の範囲内の実施のため、合わせ技が必要。

サイクリング協会
第一次自転車ブーム時に、小売店のバックアップで設立された組織。守備範囲が自転車小旅行の域に留まっている。

と

自転車競技連盟
国際大会に選手を派遣する役割を担うが、競技環境整備や選手の育成には、日本の自転車に対する考え方が壁となっている。

と

自転車の日常利用
自転車には二面性があり、歩道走行問題はその端的な例。警察はそれを「歩行者的利用」と「自動車的利用」と表現している。

と

オルタナティブツーリズム
自転車による地域興しには、マスツーリズムに対するこの考えが重要で、エリアに合った観光メンテナンスをする自転車ソフトを模索する。

「サイクリングはレースを含むスポーツサイクリング全般」とは欧米の考え方ですが、日本では、レクリエーションのサイクリング協会と、チャンピオンスポーツの自転車競技連盟が存在しています。しかし両団体とも、MTBを含むボーダーレスの自転車ソフトには対応出来ていない状態です。

また、自転車には「スポーツ利用」と「日常利用」があり、それもボーダーレスであり、関係者がその扱いに苦慮しています。

その延長線上に、自転車を使った地域興しイベントがあり、実は道路交通法に抵触する内容での運営が主流となっていて、マナーが置き去りにされています。

そのため“観光メンテナンス”と言う視点から、「オルタナティブツーリズム」に通ずる「ツーリングコンペティション」を **自転車協会** に提案している最中です。

補足の補足の補足！ （2017～2018のローカル企画案と全国展開案！？）
「明治維新150周年応援企画」と「100×100」と「ワークショップ」

BAA(Bicycle Association Japan Approved)マークや、SBAA（スポーツBAA）マークは、自転車協会の安全基準に適合した認定証（シール）で、国内で販売されている自転車全車両への貼り付けを目指しています。また、SBAAプラスでは、ショップでソフトも売ることを模索しています。
しかし、販売チャンネルの急激な変化や、利用者の想像以上の多様化など、課題も多く、それに向き合うサイクリングネットワーク再構築の必要性を、このコラボ企画（ワークショップ）で訴えたいと考えます。

★自転車さんぽ♦♦毛利チャレンジトーナメント

主体：転遊研（※自転車協会へ後援の依頼）　**企画協力**：いわくに研究会、岩国市観光協会

内容・展開：THT26のトーナメント企画。初年度は関ヶ原以西の毛利関連エリアで8月～2月にかけて実施。決勝戦は3月に岩国で予定。2年目は北海道函館から九州長崎までの維新関連エリアで予選を実施し、決勝戦は山口県防府市を予定。

★岩国かるたドライブ@シリーズ毛利両川

主体：いわくに研究会　**企画協力**：きらめき財団へ申請予定

内容・展開：THT26のドライブバージョン。山口県内での定期開催を目指し、観光ドライブのモデルルートの構築を目指す。

★100×100ベーシック2017（ルートエヌ・リボーン）

主体：THTジャパン準備委員会　**企画協力**：問屋系メーカーへアプローチ

内容・展開：100kmを100回走る入門編のナショナルブルベ。1995年に提案した「ルート・エヌ」のリニューアル企画。

★さんいん1300#2017

主体：THTジャパン準備委員会　**企画協力**：―

内容・展開：関西～下関～関西の1300kmを110時間で走破する、自転車旅の認定。2007年より8月中旬に実施中。

★ディアゴナール近畿

主体：THTジャパン準備委員会　**企画協力**：―

内容・展開：100×100の派生企画。近畿エリアを5角形に見立てその対角線走破を認定する。

※「ナショナルブルベ」と「THTジャパン」・・・日本全国を網羅する入門編のブルベを「ナショナルブルベ」とし、その取りまとめを行う任意団体を「THTジャパン」とします。

★リバーtoリバー信州

主体：THTジャパン準備委員会　**企画協力**：―

内容・展開：100×100の派生企画。信濃川と分水嶺で接する、利根川、富士川、天竜川、木曽川のリバーサイド走破を認定する。

☆ヴェロマルチ山口Ⅱ

主体：VMYネットワーク（仮）　**企画協力**：山口県サイクリング協会、山口県自転車競技連盟

内容・展開：「トレジャーロゲイン」や「ディアゴナール山口」をプロショップネットワークと連携実施し、県内の自転車愛好家のニーズに応える。 ※トレジャーロゲイン：THT26＋ロゲイニングで初心者から上級者までカバー。　※ディアゴナール山口：柳井～長門と下関～益田の対角線ルートを自宅発でループ走行する。

★やましろMTBツアーズ

主体：VMYネットワーク（仮）　**企画協力**：やましろ商工会、岩国市観光振興課

内容・展開：やましろ街道や岩国往還、津和野街道などのMTB好みの山道の再利用の提案。ルート開拓、道普請、搬送システム、宿泊補給体制、セキュリティ、等々、地元の協力を得て、初心者から上級者まで楽しめるMTBフィールドを提供する。

★バイシクルグランスミーティング2017～2018

主体：富士八ヶ岳バイシクルグランスミーティング実行委員会　**企画協力**：BEI、自転車協会、自転車メーカー

内容・展開：本来ならツーリングコンペティションの山道バージョン「MTBラリーレイド」を仕掛けるべきですが、諸問題があり、クローズドサーキットのMTBイベントを再提案します。但し、ツーリングとワークショップを併催するブロック大会規模のイベントが必要条件と考え、「富士八ヶ岳BGM」は、その実現に向けたトライアル企画と位置付けて提案します。